校長室だより～燦燦～ №２７０

ステレオタイプ

2021.1.14

「差別や偏見はもってのほか」誰でもがわかっていることである。人種、思想、信条などを超えて公正な社会を望んでいる人が圧倒的に多いことだろう。にもかかわらず、差別や偏見はなくならない。新型コロナウイルス感染者をはじめ関係者を差別する事例も聞く。

差別の本質を捉えるには、その背景にあるステレオタイプや偏見から考える必要がある。ステレオタイプとは、これまでの経験や知識を土台として、ある共通の特徴をもったグループに属する人たちに対して抱くイメージのことである。若者は・・・、高齢者は・・・、日本人は・・・というようなグループ化をして、何かを考えたことはないだろうか。

偏見とは、ステレオタイプに、好き、嫌いのような感情が伴ったものである。若者はモラルに欠ける、高齢者はわがまま、日本人はまじめ・・・。これらはすべて偏見である。好き、ポジティブの感情が伴っても、ステレオタイプに基づく考えは偏見となる。

差別とは、ステレオタイプや偏見に基づき、ある共通の特徴をもったグループに属する人に対して何らかの行動を起こすことである。

今回のコロナ禍で問題になっているように、医療従事者はウイルスに接触する機会が多く危険だからと、本人またはその家族が、人の集まる場所、会社、学校に行こうとするのを拒否することは差別に当たる。女性や浪人生が、医学部受験の際に何ら知らされることなく一律に点数を引かれていたのも差別である。

ステレオタイプと偏見は個人の心の中に存在するものである。一方、差別はその対象となる人たちが実質的に利益や不利益を受ける点で大きく異なる。

複雑な世界をグループ化し、効率的に理解しようとすること自体は、人の認知能力が高いからこそのことであり、決してわるいことではない。しかし、それが今回のコロナ禍により、他者を傷つけ医療従事者、若者、高齢者のようなグループに基づく分断を招いてしまっている現状は大きな問題と考える。

では、コロナ禍において、なぜここまでステレオタイプからの偏見、差別が生じ、社会問題となているのだろうか。その大きな原因としては、自粛によるフラストレーションやウイルスに対する恐怖、不安があるであろう。先の見通しが立たない状況に置かれると、人は非常に不安になる。逆にいうと、先の見通しが立てば、多くの人は将来の目標に向けてポジティブな姿勢で努力をすることができる。

差別に関して長期的な視点に立つと、それが自分のみならず社会にとっても不利益をもたらすことに気づかされる。もし今後、自分が感染したとしたら医療従事者のサポートなしにはいられない。感染者に対する差別を目の当たりにすると、感染者の中には感染を隠す人も出てくるだろう。それは結果として、感染のさらなる拡大を助長することになる。長期的な視点に立って考えると、差別をすることは一時的なフラストレーションや不安を低減させるのみで、その先には何もいいことはないことに行き着く。

差別につながる偏見も、「自分は偏見を持っていた」ということに気づき、それに対して「恥ずかしい」と思うことができれば、後の差別の抑制につながるのではなかろうか。ステレオタイプから偏見、そして差別という問題は、一朝一夕に解決するようなものではない。だが、人として常に考えるべき大きな課題の一つである。